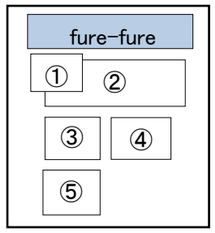
高知県立大学　看護学部　学生生活通信　　2024年2月　第26号

# fure-fure

## 表紙の写真




①4回生：国家試験の壮行会（助産）
②4回生：国家試験の壮行会
③2回生：就職ガイダンス
④1回生：ふれあい看護実習
⑤3回生：就職ガイダンス

## 学部生へのメッセージ

池田光徳　先生

大学での勉強の仕方

「すぐに役に立つ知識」を持つ人材を（おそらく経済界を中心に）世の中は求めているといいます。実は「すぐに役に立つ知識」なら既にマニュアルに書いてあり、１日もあれば身につきます。それよりも汎用性のある「基本的な知識」の方が仕事に役に立つのです。

皆さんの先輩が毎年何人か大学院生として大学に戻ってきます。先輩たちは異口同音に、自分には「知識がない」と言います。私は知識を身につける努力をしなかったのでしょうと言いたくなります。「考えることが重要で知識は二の次だ」という間違った考え方に洗脳されて、学部生時代に一つひとつの「基本的な知識」を身につけることをしてこなかったのだと思います。例えば疾患に対する「基本的な知識」は、その疾患の定義（概念）、疫学、病態生理、検査所見、治療法など、その疾患の患者さんに関わる共通項目です。他の科目も同様です。「用語」をきちんと説明できることが肝要です。

看護は個別性の学問だということを聞きますが、共通項を知らずして、個別性は理解できないというのは自明の理です。さらに、知識なしに、議論することも考えを深めることも不可能です。議論の方法を学ぶよりも、今は議論の対象になるネタ（知識）を身につけて戴きたいと思います。

## 新カリキュラムでのふれあい看護実習について

竹崎久美子 先生　　小原弘子 先生

ふれあい看護実習は、“看護の対象となる人びとと初めて出会いふれあう実習”です。実習目的を、「地域で暮らす高齢者とのふれあいを通して、看護の対象となる人を生活者として理解すること」とし、1年生後期に行われます。今までの実習場所は、治療や検査目的の患者さんが数多く入院している急性期病院でしたが、令和4年度より、“宅老所”という高齢者の通いの場で実習させていただいています。

“宅老所”とは、介護保険の通所サービスとは異なり、高知市独自のなごやか宅老事業に基づいて、高齢者が住み慣れた家庭や地域で健康で豊かな生活が送れることを目的に、民家や老人福祉センター等を活用し、利用される方々がなごやかに思い思いの一日を過ごす施設です。宅老所を利用されている高齢者の方々は、一緒に昼食をとったり、いきいき百歳体操や歌、手工芸などの活動を行い、家庭的な雰囲気の中で日々過ごされています。学生は4日間の実習期間中、初日と4日目は学内で学生間の学びを共有しますが、2日目と3日目に市内15カ所の宅老所に分かれ、宅老所での活動を高齢者と一緒に体験します。高齢者と会話したり、宅老所で行われる様々な活動に参加させていただく体験を通して、実習後のレポートの中では異口同音に「高齢者は、宅老所の場を通して互いに助け合ったり心配しあったり、自身の強みをいかして元気に生活していた」と述べていました。

我々教員が最初の看護学実習に宅老所を選んだ理由は、「入院している姿が本来の人の姿ではなく、それぞれに本来の生活があることを念頭において看護の対象となる人びととかかわってほしい。」との思いからです。この実習での学びを、2年生からの病院実習でもいかせることを願っています。

## 地域で学ぶ-看護地域フィールドワーク-　　竹崎久美子 先生

本学では平成27年から「大学と地域が共に学びあう」という域学共生の理念の元、共通教育にも「域学共生科目」をおき、「地域の課題に関心を持ち、積極的に参画する意欲と能力を有する人材を育成」しています。看護地域フィールドワークは、その一環を担う看護の専門科目として令和3年度からスタートした選択実習科目です。主に2回生で選択します。

この科目では、学生が自分で関心を持った地域の健康課題を選び、それに携わっている人々に会いに行き、話を伺ったり、実際に活動に参加させて戴きます。これまで、「認知症カフェ」「いきいき百歳体操」「こども食堂」「放課後児童クラブ」などの場を見いだし、主催者のインタビューや実際の活動参加を行ってきました。また開業助産師さんや母校の養護教諭、地域の健康支援に携わる保健師さんにも話を伺い、地域の健康課題や、専門職ならではの役割について貴重なお話を伺っています。自分自身の進路がまだ漠然としている2回生にとっては、実際に生き生きと実践活動されている先輩との出会いは、大いに刺激を戴けるようです。

看護学部の教員が地域で行っている健康課題活動に参画し、課題解決について学ぶグループもあります。地域住民向けに配信されている高知県立大学健康長寿センターYoutubeチャンネルでは、複数のコンテンツの作成に携わらせて戴きました。在学生･教職員向けの「防災キャンパスツアー」の動画作成では、南海トラフ地震について学生たちが学習し、学内での留意事項などをまとめて動画のシナリオを作成してくれました。地域の高校生と一緒に、地域課題に関する意見交換会を行うグループもあります。

看護の基本は、まずそこに暮らす人々についてよく知る事。看護地域フィールドワークでは、自ら地域の人々の暮らしを訪ね、学ぶ姿勢を育んでいます。

教員と一緒に防災啓発ビデオを作成
（高知県立大学ホームページ『災害対策：高知県立大学の防災･減災への取組み』より）
https://www.u-kochi.ac.jp/site/bousaihp/

## 学生の活動「UOK手話サークル～誰一人取り残さない街づくり～」

４回生　徳永　旭

UOK手話サークルは、令和2年度に創設し、少しでも多くの学生・若い世代に「聴覚障がい者」「手話」について知ってもらい、理解を拡大していくために活動を行っています。活動を始めて4年目ですが、初めは新型コロナウイルス感染症の影響により思うような活動ができませんでした。このような環境の中でも活動できる時間を最大限に活用し、サークル員とともに聴覚障がい者・手話への学びを深めてきました。地道な活動により、現在は看護学部・社会福祉学部・健康栄養学部から合わせて50名以上の学生がサークル員として一緒に理解を深めています。

主な活動として、日常会話でよく使う手話の単語の学習や学習した単語を用いた文章表現、聴覚障がい者に関わる歴史や現状等についての学習があります。毎週木曜日にサークルを開催し、毎回新しい単語を覚えるなど少しずつ技術を磨いています。また、活動の様子をSNSに投稿するなどサークルに参加していない学生や他大学、地域の方々にも手話を身近に感じてもえるよう工夫をしています。

今年度からは新たに高知県立大学「県民大学」学生プロジェクト「立志社中」の活動も開始しました。立志社中の活動では、「咲む」という聴覚障がい者を主人公に、聴覚障がい者を取り巻く現状を描いた映画の上映に始まり、手話文法の学習会や手話×災害セミナーの実施、高知県聴覚障害者協会にご協力いただき、聴覚障がい者の方を講師に招いた講演会を行いました。UOK手話サークルは、大学内だけでなく幅広く地域の方々に参加していただき活動をしてきましたが、これらに加え、新聞で活動の様子を取り上げていただいたり、高知医療センターの学術集会で発表する機会をいただき、「聴覚障がい者」「手話」について幅広く多くの方に啓発をしていくことができていると感じます。今後もより多くの方に聴覚障がい者や手話の魅力を伝えていきたいと思います。

ご意見、ご感想など、お寄せ下さい。　fure-fure-kango@cc.u-kochi.ac.jp

## 各学年の学生生活

**■1回生■**

１回生の後期は、前期に比べてより専門的な内容の授業が増えていきましたが、これまでに学んだ知識が実践と繋がる楽しさを感じながら、講義や演習、課外活動に一生懸命取り組んでいました。写真は、フィジカルアセスメントや生活援助論の技術テストに向けて練習している様子です。実際の患者さんに実施することを想定し、安全や安楽に配慮しながら真剣に取り組んでいました。また、12月と２月に初めての実習となる「ふれあい看護実習」がありました。宅老所での実習では、地域で暮らす高齢者とのレクリエーションやコミュニケーションなどのかかわりを通じて、自分たちとは異なる世代の人々の生き方や価値観を知り、それらを尊重していくことの大切さも学びました。

**■2回生■**

２回生は、８月～９月にかけて、初めて臨地での看護基盤実習がありました。これまで机上で学んできた医学的な基礎知識をはじめ、看護の専門教育科目や看護技術演習と実践のつながりを実感できた貴重な学習となりました。そして、看護師という仕事の大変さや魅力を直に感じ、後期では気持ちを新たに講義や演習に取り組んでいます。

１月には、学生支援課・就職課による「就職ガイダンス」で就職までのプロセスについて説明を受けました。自分がどのような領域・看護に関心があるのか、“自分自身の将来像”について探求することだけでなく、インターンシップに参加したり、先輩にも話を聴くなどの情報を収集するといった主体的な活動の大切さを聞き、これからの２年間の過ごし方について考えるきっかけとなりました。

こうした学習や演習、地域での実習や活動を積み重ね、患者さんや利用者さん、地域の方々の前に立つ看護職者として適切な姿勢を育みながら、看護学を探求し続けることができるよう、日々、知識や技術を培っています。

**■3回生■**

３回生は、大学生活も後半に入り、実習や自らの将来を考える時期に入りました。領域看護実習は、10月から２月に集中的に行われるもので、６つの領域（急性期・慢性期・小児・母性・精神・地域）の実習に取り組み、各領域で学んだことを別の実習にも生かして学びを深めてきました。実習で出会う患者さんや住民の方、看護職や専門職の皆さんからご指導いただき、一歩一歩自分の足で学びを前に進めてきました。また、将来を見据えての学年企画・就職ガイダンスや看護職者として活躍している先輩からのお話を聞く会にも積極的に取り組んでいます。これまで描いてきた看護者像を自らのものにすべく、一人ひとりが真剣に考え、学習計画やこれからのスケージュールを具体的にしています。これら実習での学びや将来像への志向は、３回生それぞれをたくましく成長させているようです。これからも自らの未来を切り開いていけるよう、力強く進んでいくことを願っています。

**■4回生■**

４回生は、11月には、すべての臨地実習を終えることができました。また、12月６日には、グループ分けから１年近くかけて取り組んできた看護研究論文を仕上げ、無事提出することができました。そして、提出後には、国家試験に向けて切り替える合間に懇話会を実施して、お菓子争奪のイントロクイズで大盛り上がり！研究の議論とはまた違う笑顔です（写真参照）。今は２月末の看護研究発表会に向けて、資料の作成に取り組んでいます。

そして、いよいよ国家試験！全員が看護師・保健師・助産師のうち２つの国家資格を目指して受験します。写真はその国家試験に向けて出発する壮行会の様子です。教員や在校生から熱烈な応援を受け、緊張感の中にも笑顔がみられていました。国家試験では、きっと４年間の学びや培ってきた力を発揮できたことでしょう。

学生生活も残すところ約１か月。一人ひとりが自分の目標に向かってラストスパート中です。